

< 事業概要 >

青字…特定健診・保健指導

赤字…社会的処方

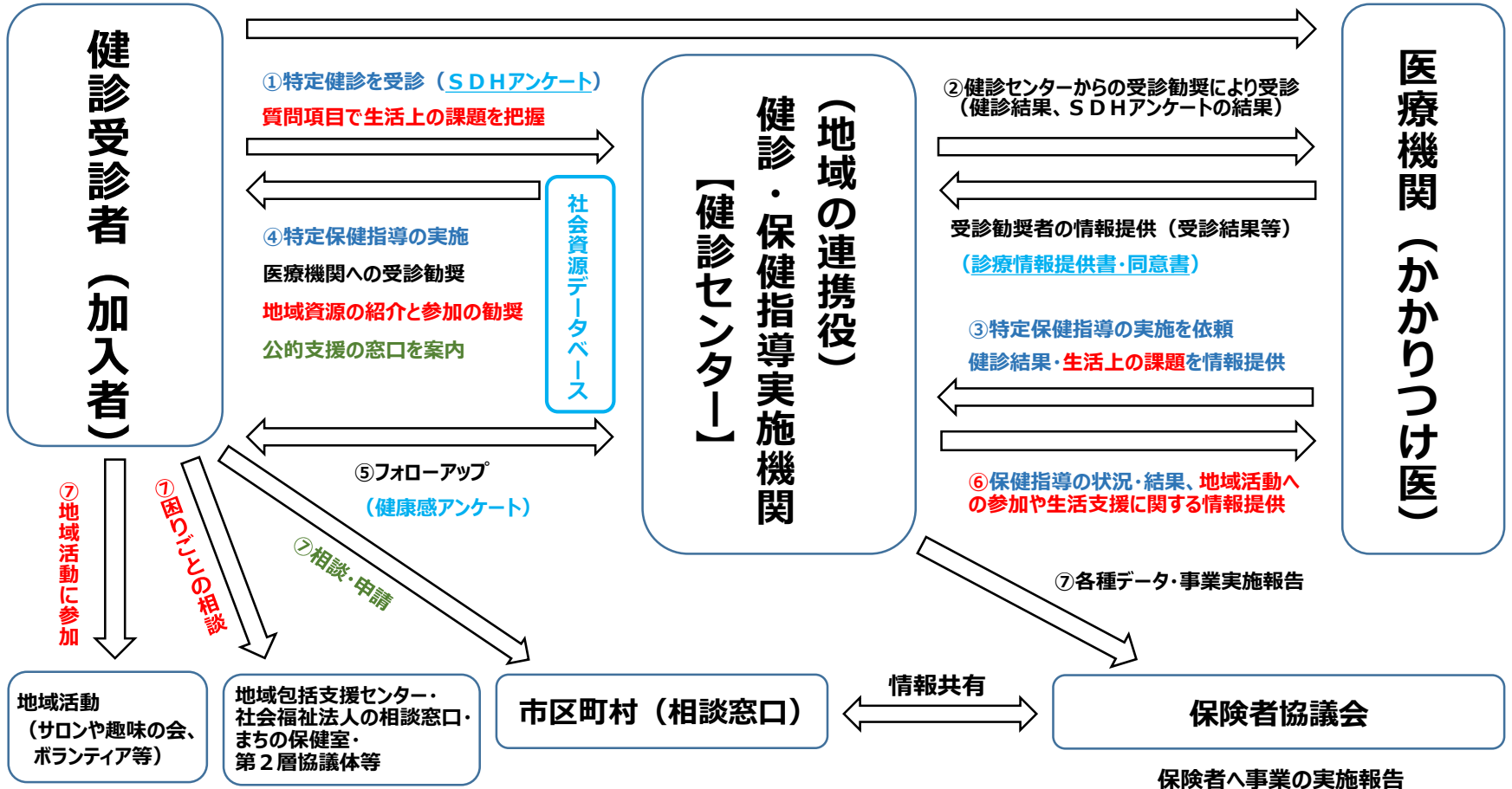
緑字…生活支援

黒字…受診勧奨・重症化予防、医療機関受診

水色…ツール

①特定健診（個別）の受診（SDHアンケート） 質問項目で生活上の課題を把握

医療機関受診の際、健診未受診を確認。特定健診（個別）を実施（SDHアンケート） 質問項目で生活上の課題を把握



令和3年度事業の成果と課題

I. 事業の実施状況

①質問シート（SDHアンケート）の実施

- ・健診会場での実施・回収

対象者 1,647名 アンケート配布 1,631名 アンケート回収 1,459名 (88.2%)

- ・質問シートを郵送・回収

対象者 2,847名 アンケート郵送 2,823名 アンケート回収 843名 (29.9%)

②保健指導の実施

- ・保健指導実施者 152名 うちSDH実施 136名 (89.5%)

③医療機関への受診勧奨

- ・保健指導実施者 152名 うち受診勧奨者（情報提供書発行数） 78名 (51.3%)

医療機関からの返信 10件 (12.3%)

II. 事業の成果

①質問シート（SDHアンケート）の効果

- ・健診会場にて「対面」で質問シートを使用することで、「生活に関する課題（経済面）」に関する質問でも、高い回答率を得ることが出来た。
- ・質問シートは、生活に関する「困りごと」や「不安」を抱える対象者の抽出（スクリーニング）に効果があった。
- ・質問シートがあることで、保健指導等の場で「生活に関する課題」を話題にしやすくなった。

②保健指導の手法

- ・質問シートの回答（視点）が加わることで、課題と改善目標の設定や取り組み方を、より具体的に提案することが出来た。
- ・その人の生活に関わることで、保健指導の期間に囚われず、継続的な支援（伴走型支援）を意識するようになった。

③医療機関との連携

- ・医療機関と連携や情報共有をすることで、心身の課題と「生活に関する課題」を総合的に支援する、新たな保健指導の在り方が見えた。

Ⅲ. 今後の課題

①質問シート（SDHアンケート）について

- ・質問シートは、「対面」ではない郵送法等では回答率が低下することから、不特定多数の人を幅広くスクリーニングする様な使い方には向いていない。
- ・段階別に複数の選択肢で回答を設定した場合、選択肢の解釈が本人の主観になりがちで、回答の精度が落ちる傾向が見られた。
- ・質問シートだけでは、その人の持つ「生活に関する課題」の内容まで探ることは難しい。

②保健指導の手法について

- ・保健指導に質問シートの回答を取り入れることで、実際とは異なるイメージや先入観を抱きがちになってしまう。
- ・「生活に関する課題」の視点が加わることで、これまでの保健指導の範囲を超えたアドバイスや支援が求められる。
- ・「生活に関する課題」への対応や改善は、月単位の様な短期間で結果を出すことが難しい。

③医療機関との連携について

- ・医療現場における、「生活に関する課題（SDH）」についての認識が低い。
- ・情報の遣り取りでは、従来の紙媒体だけではなく、医療現場のICT化に対応した新たな情報共有方法やツールが必要となる。
- ・円滑な情報共有や支援を行うには、関連する職種や団体の役割について、相互に理解を深める必要がある。

④ケース検討から見えたもの

- ・電話による指導や支援の場合、手軽な反面、（相手の表情が見えずに）ちょっとした気持ちの変化を見逃す恐れがある。
- ・質問シートは、質問内容がその人の置かれた状況に当てはまらない場合、「ない」と回答されてしまうことがある。
- ・その人の健康感や幸福感の不満は、質問シートだけではその要因を探れない（生活の全体像を把握して総合的に探る必要がある）。
- ・対象者が心身に疾患や不安を抱えている場合、マニュアルに基づく指導よりも、かかりつけ医等と連携して医療と生活の両面から支援する必要がある。